

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの			
ピホナゾール	・マイコスポールクリーム ・マイコスポール液	抗真菌作用 ・ピホナゾールは、皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)及び黴菌(Malassezia furfur)に優れた抗真菌作用を有する。 作用機序 ピホナゾールは、真菌細胞に対して二元的な作用機序を有する。低濃度域では細胞膜の必須構成脂質成分であるエルゴステロールの合成を阻害し、高濃度域ではそれに加えて細胞膜のリン脂質と特異的に結合することにより膜の物性を変化させる。いずれの効果も最終的に細胞膜の構造・機能を障害し、その結果、抗真菌作用が発現される。						本剤の成分過敏症既往歴、著しいびらん面	妊婦(3か月以内)又は妊娠の可能性のある婦人・亀裂、びらん面			・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しいびらん面には使用しない。 ・亀裂、びらん面には注意して使用する。	1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 白癬: 足部白癬、体部白癬、股部白癬 カンジダ症: 指間糜爛症、間擦疹、皮膚カンジダ症 黴風		
ピローニトリン	医療用医薬品としてなし															

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化 等に伴う使用 環境の変 化			
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	塩酸ソラフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒドラミンはあり ーレスタミン コウ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。					頻度不明(過 敏症)					炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎:適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。		使用部位:眼の まわりに使用し ない。			通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	マレイン酸ク ロルフェニラ ミン	外用薬とし てなし																	
鎮痛成分	クロタミン	オイラックス	本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないこと 、またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序を 異にすると考 えられる。一 般には、皮膚 に軽いしゃ く熱感を与 え、温覚に対 するこの刺激 が総合的に そう痒感を消 失させるとい われている。					0.1~5%未満 (熱感・しやく 熱感、刺激症 状(ピリピリ 感、ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強、紅斑増 悪、分泌物増 加、浸潤傾 向)	5%以上(過敏 症)		本剤に対して過敏 症の既往歴	高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性の ある婦人への大 量又は長期にわたる広 範囲の使用、乳幼 児・小児に対する 広範囲の使用	皮膚症状が 強い浸出性 の皮膚炎:適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。	・眼あるいは眼 周囲及び粘膜 には使用しない。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じること があるが、通常 短時間のうちに 消失する。	高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る。	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠 の可能性のある婦人:大 量かつ広範囲の使用は 避ける。	湿疹、尋麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス		
取れん・ 保護成分	酸化亜鉛	酸化亜鉛	皮膚のたん 白質と結合し て被膜を形成 し、取れん、 消炎、保護並 びに緩和な防 腐作用を現 す。また、浸 出液の吸収 及び分泌抑 制により、創 面又は潰瘍 面などを乾燥 させる。					5%以上また は頻度不明 (発疹、刺激 感等)	5%以上また は頻度不明 (過敏症状)		濃度または広範囲 の熱傷(組織修復 の遅延) 患部が湿潤してい る場所(組織修復 の遅延)				使用部位:眼に は使用しない。 使用時:誤って吸 入しないよう注 意させる。		・外用剤(散布剤)として 15~100% ・軟膏剤・液剤(懸濁剤・リ ニメント剤・ローション剤 等)として2~60%	上記濃度に調整し、いず れも症状に応じ1日1~数 回患部に適用する。	軽度の皮膚病 変の取れん、 消炎・保護・緩 和な防腐

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
			併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康故 害のおそれ			
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン	ベルカミン注、表面麻酔類似と考え使用	感覚・求心神経繊維のNa ⁺ チャンネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエビネフリンを添加して用いる		振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)			本剤に対し過敏症の既往歴		本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。					使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05~0.1%注射液にエビネフリンを添加したものを、通常成人10~30mgを使用する。 伝達麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエビネフリンを添加したものを、通常成人3~40mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエビネフリンを添加したものを、通常成人1~40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1~2%液にエビネフリンを添加したものを、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05~0.1%液にエビネフリンを添加したものを、通常成人には1~5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエビネフリンを添加したものを、通常成人男子10~20mg、女子3~7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025~0.05%液にエビネフリンを添加したものを、通常成人10~20mgを使用する。 ・局所鎮痛には、0.025~0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエビネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1~2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 外用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸リドカイン キンロカイン液「4%」	作用機序 塩酸リドカインは、神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。麻酔効果・作用時間は塩酸リドカインの表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロロカインよりも長い。			意識障害、振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眩暈、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分又はブミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴	高齢者又は全身状態が不良 心刺激伝導障害(症状悪化) 重症の肝機能障害又は腎機能障害(中毒症状の発現) 幼児(過量投与・中毒症状の発現) 高齢者、小児、全身状態が不良、肥満者、呼吸器疾患を有する患者で前投薬や術中に投与した鎮静薬、鎮痛薬等を使用する際				高齢者：大量又は長期にわたる広範囲の使用 妊婦又は妊娠の可能性がある婦人：大量又は長期にわたる広範囲の使用 乳幼児・小児：広範囲の部位への使用しない。 過量投与 徴候、症状 中枢神経系の症状：初期症状として不安、興奮、多弁、口周囲の知覚麻痺、舌のしびれ、ふらつき、聴覚過敏、耳鳴、振戦等があらわれる。症状が進行すると意識消失、全身痙攣があらわれ、これらの症状に伴い低酸素血症、高炭酸ガス血症が生じるおそれがある。より重篤な場合には呼吸停止を来すこともある。 心血管系の症状：血圧低下、徐脈、心筋収縮力低下、心拍出量低下、刺激伝導系の抑制、心室性頻脈及び心室細動等の心室性不整脈、循環虚脱、心停止等があらわれる。		塩酸リドカインとして、通常成人では80～200mg(2～5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 (使用方法) 耳鼻咽喉科領域 鼻腔内、咽喉に刺激性薬物を塗布する前処置、耳管カテーテル挿入、下甲介切除、鼻中隔矯正、扁桃切除、咽喉頭鏡検査等の場合本剤の適量(1回5mL(塩酸リドカインとして200mg)以内)を塗布又は噴霧する。 泌尿器科領域 膀胱鏡検査、尿管カテーテル挿入、逆行性腎盂造影法、凝血除去、結石処置、経尿道式尿道乳頭腫切除等の場合4%液を倍量に希釈し、その約10mL(塩酸リドカインとして200mg)を尿道内に注入し、男子では陰茎を指搾子ではさみ、女子には綿栓を施して5～10分間、液を尿道内に滞留させる。 気管支鏡検査 全身麻酔時の挿管には本剤を倍量に希釈し、その適量(10mL(塩酸リドカインとして200mg)以内)を噴霧する。 幼児(特に3歳以下)：低用量から投与を開始(麻酔効果の把握が困難なため高用量又は頻回投与とされやすい)	表面麻酔

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づき習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの	
殺菌・消毒成分	塩酸グルコキシジン グルコン酸塩として5%ヒビテン液	抗菌作用(in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に劣る。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。		ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。) ・腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(腫・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼			・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。			本品は下記の濃度(グルコン酸グルコキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ					
殺菌・消毒成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/v%チアミトール水						頻度不明(過敏症)			粘膜炎、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				<ul style="list-style-type: none"> 原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。 深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。 経口投与しないこと。洗腸には使用しないこと。 密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 		<ul style="list-style-type: none"> 粘膜炎、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力を起こすおそれがある)。 	<ul style="list-style-type: none"> 効能・効果 用法・用量 (塩化ベンザルコニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒:皮膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または密閉に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する。 ⑦腫瘍洗浄:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。 ⑧結膜囊の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 			<ul style="list-style-type: none"> 炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
殺菌・消毒成分	フェノール	フェノール	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)			・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)				<ul style="list-style-type: none"> ・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。(吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。) ・紙袋を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期間に使用しないこと。 ・長期使用による健康被害のおそれ。 		<ul style="list-style-type: none"> ・機能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) ・排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) ・下記疾患の鎮痒 ・痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液 ・フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) ・軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍) 		

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
				併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
角質溶解成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用:細胞間基質を溶解し鱗屑の剝離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用:微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。					頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身的投与の場合と同様の副作用)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど、湿潤、び爛が著しい場合は、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合:副作用があらわれやすいので注意して使用。眼下部には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射等全身的投与の場合と同様な副作用発現のおそれ。長期間使用しても症状の改善が認められない場合は、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。			1.通常サリチル酸として、5.0%の絆創膏を用い、2~5日ごとに取りかえる。2.次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1~2回塗布または散布する。小児:サリチル酸として 0.1~3%、成人:サリチル酸として 2~10%	1.疣贅・鶏眼・胼胝腫の角質剝離。2.乾癬。白癬(頭部・浅在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、癬風、紅色靴癬疹、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山連環状靴癬疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌蹠膿疱症、へブラ靴癬疹、アトピー性皮膚炎、さ癩、せつ、皸癬症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患
消炎成分	グリチルレチン酸	テルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制・ラット、肉芽腫抑制・ラット、抗紅斑・モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。						5%以上又は頻度不明(過敏症)					眼科用として使用しない				通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎	